

観」はこうした課題の達成に応える方法的原理である、と理解したい。

河原和枝著

## 『子ども観の近代』

中央公論社、1998年

松山雅子（大阪教育大学）

社会の価値観がいかに生成され、継承されてきたか、新旧の価値観のあいだに交わされる対話のダイナミズムをすくい取ろうとするとき、子ども観はきわめて魅力的な視座となる。先行研究にあつて、子どもは、制度と呼ばれ、装置、枠組みと命名された。いかに社会が子どもをとらえようとしてきたか、その概念形成のありようは、わたしたち大人の精神史の反射鏡でもあった。

いうまでもなく、大人は子どもではない。かつて子どもであっただけである。しかも、きわめて個人的な範疇で子どもであった。だが、子どもであることを意識することなく子どもであったかどうかは疑わしい。なぜなら、そこに大人なるものが存在していたからである。

子どもと大人。根を同じくして、なお反駁しあうもの。あらゆる芸術の〈詩人〉だけが、真の意味でこのパラドックスにわけいり、魅せられ、珠玉の作品を生むことができる。かつてこう語った〈詩人〉がいる。「子ども時代が人生のもっとも幸福な時期であるとは必ずしも言えません。でも子どもにだけ可能で純粋な幸福があるものです。」彼は、後に子どものための作品『クマのプーさん』を紡ぎだす。そこには、憧憬というくりだけでは掴みきれない〈子ども時代〉が形象化されている。確実に過ぎゆくもの、それゆえに歴然としてそこにあり、特別な場所、朋友、詩精神が揃ったとき立ち返ることのできる〈時期〉としてである。彼の生んだ4編の作品は、時代の読者—子どものみならず大人—を魅了したといわれ、今日では、イギリス児童文学の代表的古典として安定した評価を得ている。そこに、20世紀前半のイギリス中流階層以上の価値観と相応じた子ども観をみてとる誘惑にかられるのは、ベストセラーになったからである。

こうした時代の寵児たる文学を追っていけば、ひとつの文学史が読み取れる。学校で習い覚えてきたそれである。けれども、子どもの物語享受のさまは、いつの時代もさらに複雑で、動的だ。プーさんのライム同様ジャバウォッキに魅せられ、先の時代の教訓物語を身近とし、一般向けの海洋小説をかじり、廉価版の冒険ものや雑誌にわくわくする。先の文学史観ではすくい取れぬ物語享受の諸相が表の系譜に伴走する。物語が与える子どもの悦楽に表と裏の住み分けを求める価値観が介在する。やっかいなことには、おしなべて形象化の綾をくぐり世に問われた作品を扱うかぎり、周到な作品論の積み重ねなくして文学史の二重構造にわけいることも、ひいては、子ども観のありようを捉えることもむずかしいということである。形象化された子ども観に時代が特別な価値づけをする、もしくは時代が形象化に向かわせる、

その本質と立ち向かうためには、時代と社会の最大公約数的な価値観をあえて抽出してみようとする巨視の目と、個々の作品が描きえた象徴の綾へと下りていこうとする微視のまなざしを両遇せねばならない。ある観点を設定し典型を抽出することで見えるものと、そこから逸脱するというか、囲い込み自体を本質的に拒否するものと、その双方をみすえるバランス感覚が問われる。社会の価値体系の一隅をなす子ども観に迫ろうとする試みが、魅惑的であるぶん困難な理由である。

河原和恵氏の『子ども観の近代』も、その怪しい魅力に挑んだ果敢な一冊である。＜子ども＞についての社会的な「知」のあり方を、明治・大正期の児童文学を素材として検証を試みられた。新書版というハンディな形態と魅力的なタイトルを伴って、多くの読者が子ども観という切り口に気づかされた功績は大きい。

論の中心は、『赤い鳥』所収創作童話にみられる子どもを軸として、3つの基本的イメージ、すなわち「良い子」「弱い子」「純粋な子」に類別「紹介し」、ひいては「時代のキーワード」「童心」の誕生をみてとることである。

書評者は、氏のよって立つ知識社会学の門外漢である。子どものための物語形態とその享受に関心を抱く者の視点で読むと、作家の実生活や理論武装と作品が一律に論じられていくことに戸惑いが無いわけではない。「センチメンタリズム」といった用語が定義なしに用いられることも同様である。文学に携わる者にとって、類別は個へ迫る契機であって、作品論をとおして常につき崩し再構築されねばならぬものだからである。

子ども観の追求には、歴史学、社会学、教育学、児童学、児童文化、児童文学など、学際的なアプローチが求められる。互いの専門領野の違いに気づくとき、己が方法論の有効性と限界を再考する好機となる。その意味において、本著作は、多様な方法論の構築をうながす貴重な契機を与えてやまない。

南本長穂・太田佳光編著  
『教育現象を読み解く』

黎明書房、1998年

雪江美久（宮城教育大学）

本書は、「主として教育学や教育原理を学ぶ人のためのテキストとして編集され」、現代社会に「生起してくる教育の問題への理解やその問題解決の方策のための概念図式やモデルを呈示できること、つまり教育現象を読み解く」ために、編著者を含めた7名の研究者がそれぞれ分担し合い、今日の教育問題に対して「新たな視角や知見、また問題理解の枠組みの提示を試み」たものである。

編者が強調し、それ故に本書の特色ともなっている点は多々あるが、中でも最も注目されるのは、第一に、本書のタイトルに敢えて「『教育』という言葉ではなく『教育現象』とい